

東芝メディカルシステムズ株式会社

CTなど医用機器の輸送に31ftコンテナ導入

栃木県大田原市に本社と工場を置く東芝メディカルシステムズ(株)は、CT、MRI、超音波診断システム、X線テレビなどの画像診断システムや電子カルテなど医療情報システムの開発・製造・販売・サービスを世界120カ国以上に提供しています。特に高速撮影や被ばく低減技術など、最先端技術を駆使したCTは、国内No.1で約50%のシェアを持っています。製品自体の機能はもとより保守・搬入などのサービスも評価され、海外にも多くの製品を輸出しています。

東芝メディカルシステムズでは、以前から中央通運(株)の20ft免振コンテナを利用していますが、2009年には大阪と福岡の拠点向けに31ftコンテナも導入しました。

「免振コンテナの免振構造は床面に施されているため、通常コンテナよりも内高が足りず、当社の主力商品であるCTスキャナ装置が入りません。その点31ftコンテナなら、いくつかに分割されている装置を概ね2セット積むことができ、受注単位も合います」と東芝メディカルシステムズSCM本部SC企画推進グループSC企画担当の八子洋一郎参事は、導入のきっかけを話しました。

同社のロゴが入った31ftコンテナは、栃木県北通運(株)が2個用意して、それぞれ宇都宮(夕)と大阪(夕)・福岡(夕)間で専用に使っています。両拠点向けについてはコンテナ出荷をベースに、オーバーフローするものはトラックを併用しています。

「コスト的にトラック輸送とあまり差はありませんが、同等コストであれば環境に優しい手段を選択するのが東芝グループの環境方針です。鉄道はスケジュールが決まっている安心感もあります」。

導入された31ftコンテナはU51A形式です。製品の梱包から輸送までを請け負う東芝ロジスティクス(株)那須ロジセンターの中津川宏主任は「31ftコンテナは製品高に合わせたタイプにして、運べる製品を増やしました。多くの製品は本体や寝台などのパーツに分かれていて、大きさにバラツキがあります。それぞれのパーツを確実に固縛するため、壁面のほか床面にも両サイドにラッシングレールを敷きました。パーツにより荷重が異なるため、トップリフター作業に支障がないか等、事前にJR貨物さんにも検



八子参事



中津川主任

証していただきました」と説明しました。

また、中津川主任は「31ftコンテナはトラックと同様に使えます。大阪と福岡の拠点向けは曜日を決めているので、トラックのようにいちいち配車をしなくても集荷に来てくれるので手間が省けます」とも。

モーダルシフトにあたっては、製造部との協調も欠かせませんでした。「列車には出発時刻がありますから、トラックのように少し待って、ということができません。このため、営業部門と事前に調整し、品揃えや梱包工程も含め、確実に集荷に間に合わせられるよう、製造部では

綿密な生産計画に基づいた製造を行っています」と八子参事。

東芝メディカルシステムズはエコレールマークの企業認定を取得し、CSR報告書等に記載しています。

八子参事は「低被ばく・省電力、かつ高い技術で、検査を受ける患者さんの負担が少ない当社の製品を購入される医療機関は、環境問題にも意識・関心が高いのです。今後、エコレールマークもアピールツールの1つとして紹介していきたい」と展望しました。



フレーム入りのX線テレビ装置をコンテナへ



コンテナ床面に敷設されたラッシングレール



CTの架台(本体)、寝台、付属機器類は別々に梱包



16



製品積載後
ラッシングレールや養生材を利用して固定する

17

31ftコンテナの往復荷化も

31ftコンテナの導入でポイントになるのが帰り荷の有無です。東芝メディカルシステムズの場合、梱包材を通い箱や折り畳み式のフレームにしている製品があり、その返送を帰り荷としていますが、積み付け用品は折りたたむと容積が減ります。そこで、同区間に定期的な輸送量の見込める工業用マシン製造大手のJUKI(株)とパートナーシップを組むことになりました。

「JUKIさんは同じ大田原市に工場があり、JUKI松江を始め関西地区からこちらへ輸送する荷物もありました。関西地区の荷物を大阪の東芝ロジスティクス倉庫へ集約して31ftコンテナの帰り荷とし、大阪(夕)から宇都宮(夕)へ鉄道で輸送することにしたのです。こうした企業の垣根を越えた取組みを進めていきたいの

ですが、当社の製品は医用機器ですから、埃や臭いを嫌う荷物です。JUKIさんのように同じ精密機械の輸送なら安心なのですが」と八子参事はコンテナの共同運用の難しさにも触れました。

宇都宮と大阪を往復する2便のうち、1便を積み付け用品の返送に、1便をJUKI製品用にしています。

「週1回運用する福岡便にも帰り荷を探していますが、なかなか難しい。東芝ロジスティクスで扱う荷物を、福岡以外の途中駅で積載したいという考えもありますが、いざ貨物があった時に、取扱番線の制限など31ftコンテナの取扱が可能なお駅や列車は、案内を受けなければ分かりにくく、思うようにいきません。もう少し実際の利用案内をしてほしい」と中津川主任は話しました。



7月からJUKIのロゴも



集荷中の集配トラック



31ftコンテナをコンテナ車へ積載 宇都宮(夕)で

鉄道で運ばれている主な製品



CT:Alexion



超音波診断装置:Aplio 500



X線テレビ装置:Raffine

鉄道貨物輸送の 営業マン

— 複合一貫輸送を円滑に —

栃木県北通運(株)はその名の通り県北部に本社を置き、元々は矢板駅で入換作業なども請け負っていました。矢板駅がORSになってからは駅業務やフロント、代行輸送をJR貨物から受託しています。宇都宮(夕)にも事務所を置き、31ftコンテナの取扱いもあります。

宇都宮貨物ターミナル駅事業所の岡崎稔所長は「ORSになったことで、リードタイムが1日多くかかるのではないかとイメージが強いようですが、逆に宇都宮(夕)の列車に合わせて代行輸送できるので、より柔軟に対応できます」とアピールします。

また、「荷主さんの求める輸送品質に近づけるよう、ラッシングのほか、養生材やボードを利用して、荷崩れしないように努力をしています。新規のお客様や貨物には(社)全国通運連盟の“鉄道コンテナお試しキャンペーン”などをご利用いただき、積み付けや養生を確認します。鉄道は発側と着側に利用運送事業者が入る複合一貫輸送ですから、到着側の利用運送事業者さんとうまく連携を取るためにも、直接会って当社や営業担当のことを知っていただくことが大切だと思っています。そのため、発側の利用運送事業者として、到着地へも出向き荷の状態をチェックしています。積み付け方法などの情報を双方で共有して輸送品質向上を心掛けています」と話しました。



栃木県北通運の岡崎所長